

健康通信

下肢静脈瘤について



心臓血管外科医師

植村 友稔

下肢静脈瘤とは、足の静脈がふくらんでこぶの様になる病気です。

基本的には、命に関わる病気ではありません。深部静脈血栓症やそれに伴う肺梗塞とは異なった疾患概念です。脳梗塞、心筋梗塞の原因とはなり得ません。しかし、下肢静脈瘤を放置しておくと、下肢のむくみや倦怠感、こむら返りといった症状が悪化したり、皮膚の色が悪くなり、ひどい方だと潰瘍といって下腿の皮膚が欠損してしまう方もいらっしゃいます。静脈瘤があるだけでは治療の適応とはなりません。前記のような症状があり、日常生活に差し支える

ようであれば何らかの治療を検討する必要がありますと考えます。

下肢静脈瘤の検査、治療について

静脈瘤は、「表在静脈の逆流」が生じることで起こります。「静脈の逆流」がどこにあるかによって治療の方法が変わります。どんな静脈瘤の治療にも必要不可欠であるのが、弾性ストッキングです。通常のストッキングに比較し、締め付けの強いストッキングであり、やや着用に手間と時間がかかります。静脈瘤の症状の改善には大きな役割を果たします。

「静脈の逆流」の有無や局在を調べるため、下肢静脈エコー検査の予約を取得してもらいます。1時間程度かけて下肢の静脈をしっかりと医師さんに確認してもらいます。その結果、大伏在静脈や小伏在静脈といった、比較的太くて長い血管に逆流を生じていると、手術室での加療が適応となります。逆に、それらの血管に逆流がなければ積極的に加療をしないことが多いです。(症状が強ければ硬化療法といって外来にて注射で治療することもあります)

下肢静脈瘤の手術について

以前はストリッピング手術といった手術が一般的でした。これは、脊椎麻酔(下半身麻酔)を行って、数cmの皮膚切開を数カ所において大伏在静脈、もしくは小伏在静脈を取り除く手術です。一泊もしくは二泊の入院が必要でしたが、安定した成績をもつ手術です。

2010年台より血管内焼灼術といった新たな治療法が日本でも承認され、2018年より当院でも開始し

ました。前述の大伏在静脈や小伏在静脈の血管の中にカテーテルを通して、レーザーもしくは高周波によって焼灼する手術です。治療効果としてはストリッピング手術と同等、もしくはやや優れているとされています。現在では90%以上の手術を血管内焼灼術で施行しております。特徴としては、局所麻酔で施行できるため、日帰り手術が可能であること、皮膚切開がストリッピング手術より小なり小さくできることが挙げられます。ただし、術後に深部静脈血栓症が生じることが稀にあるため、定期的なエコーのフォローが必要です。また、適応とならない患者様もいらっしゃいますので、外来にて相談してください。

まとめ

下肢静脈瘤は命には直結しない病気ですが、生活の質を著しく下げることがあります。適切な治療をすることで、症状が劇的に改善する患者様もいらっしゃいます。下肢静脈瘤に悩まれている方は是非一度ご相談ください。

